新時美術評

近藤誠一

Z世代と美術

ある精神科の先生から、Z世代と呼ばれる若者たち（10代半ばから20代後半）は、「生きづらさ」を感じているという話を聞いた。モノも情報も豊かなこの時代に何を言っているのか分からぬまま聞き捨てていた。しかし最近、ある全国紙に掲載された大学4年生の投書を読んで、俄然興味が沸いた。それによればZ世代には共通した想いがある。あらゆる「リスク」を回避することが重要で、そこに「幸福の本質」があるということだ。「リスク」には、就職後の転職や、好きなTVドラマが見られなくなることも含まれる。「苦痛と感ずる障害を避けようとする」のだそうだ。就職採用試験では、「何がしたいのか」ではなく、「何をしたくないか」を聞いて欲しいという。

この投書を読んでこの国の将来に不安を覚える大人は少なくあるまい。苦痛や障害は人生につきものであり、それから逃げるのではなく、それに真向から挑み、乗り越えてこそ人は成長するものだ。「近頃の若者は……」という定型のぼやきが聞こえてくる。しかしこの話を私の大学の一年生に聞いたら、友達の6割はそのように考えているという答えが返ってきた。また本屋の店頭で、『哲学を知ったら生きやすくなった』という漫画本が出ているのを偶然発見した。なるほどこれは今や社会現象になっているのだ。

では何が彼らをそうさせたのか？

多分彼らに責任はない。世界が激変する中で、「失われた30年」という歴史的恥辱を演出してしまったわれわれ大人たちにこそ責任があるのではないか。低位安定した政治、ほどほどの豊かさ、安全、迫りくる戦争危機の不在など、一見「恵まれた」環境に甘んじて、経済不振、少子高齢化、環境問題などの課題に抜本的に取り組んで来なかった。もともと日本社会の伝統であった「出る杭は打たれる」という社会風潮に甘んじて、「苦痛」を伴う改革を避けてきた。政治も企業も。その典型が「政治とカネ」問題の再来であり、世界で突出した産業界の新陳代謝率の低さだ。

これらに加えて現在はグローバル競争の激化に起因する、行き過ぎた効率主義、短期成果主義（数値主義）の下で、日本社会は自らをさまざまな制約でがんじがらめに縛っている。タイパ（タイムパフォーマンス）、コスパ（コストパフォーマンス）、コンプライアンス、ガバナンスなどのカタカナの制約が社会を闊歩する。SNSがそれを増長する。

これではこれから社会に出ようとする若者がすくんでしまうのも無理はない。新型コロナウィルスがスマホ依存を高め、友達との人間関係の処し方（喧嘩の仲直りの仕方）を学ぶ機会を奪ってしまったこともあろう。

彼らにはもともと立派なチャレンジ精神、何を言われても好きなことに夢中になる資質があることは、オリンピック、パラリンピックや、クラシック音楽の世界コンクール、将棋の名人戦などを見れば明らかだ。スポーツと芸術の分野には、「出る杭は育てる」風土があるのだ。それを政治や経済に広げることはそれほど難しいことではあるまい。美術の世界にもまだまだ彼らの活躍の余地を広げる余地があるのではないか。

大人にできることは、ぼやくことではない。彼らの出る杭を「育てる」ことなのだ。

（近藤文化・外交研究所代表）